赤馬通信
第７号

私の学長の仕事

当研究所理事・下関市立大学学長　下山　房雄

私の職業生活は、当時世田谷の祖師谷にあり、現在川崎の宮前区菅生にある労働科学研究所で始まった（1958 年～）。その後、横国大、九大を経て、足掛け５年前から下関市立大学学長の仕事に就き、現在に至っている。最初の職場と、現在の職場で、共通の点がある。毎日出勤するということだ。労研ではよく遅刻して、先生だった藤本武さん（去る６月９日に 90 歳で没）に折々叱られた。現在は、学長公舎から関門海峡対岸の戸畑・新日鉄製鉄所、八幡・皿倉山を眺めながら坂を下って５分で学長室到着、９時にはデスクに座って稟議書の閲読捺印を始めメールを開けＰＣを叩くという日課開始である。専任の秘書はいない。

学長は学長室デスクに悠々と座っているだけの人というイメージがあるらしく、友人から「忙しいのですか」と訝るような質問をされることが多い。隣の東亜大学山崎正和学長は、月に一度、芦屋のご自宅から出勤され、数日下関に滞在という勤務ときく。中央政官界の要路の人に会うとか、学内のごく重要事項につき重みのある言葉を発するだけで十分の重量級の著名看板学長なのだろう。同じ「学長」という名前でも、私は軽くセカセカと忙しい。

市議会前議長が「人格不高潔で学長に相応しくない。市長は学長の思想信条を律せよ。」と言い、現議長からは「お前は共産党だろう。白状しろ。市議 36 人中 33 人は学長辞任を願っている。辞めろ」と初対面でいきなり言われた立場にある学長という点では緊張する場面も多い。逆に私のファンになって折々学長室にみえられ、中には妻とともに食事に招いてくださる市民もいる。自由と民主主義が国是の国で、学長として大学のあり方について、社会科学者として社会のあり方について発言しなくてどうすると公言し、できる範囲でその線で実践してきたわけだから、敵も作ったが味方もできたというところであろうか。

日の丸事件の経験から「刺すという人以外は誰とでも会う」を原則としている私を訪ねて学長室にはさまざまな人が来る。電話もかかってくる。驚くのは、商品投機などマネービルのセールスの電話が多いということだ。その種の業者にとって格好の顧客層になっている種類の学長もいるというわけなのだろう。金沢のいくつかの私大学長が、石川県出身の文教族政治家でもある森前総理に政治献金をしていたスキャンダルが暴露されたことがあったが、その種の人々の学長の仕事と私のそれとは全く違う。私は市民運動社会運動活動家とはよく会うが、政界要路の人物と会うことはまずない。

さて、集まりでの学長挨拶は、学生サークルのメディアへの挨拶執筆と並んで、学長の日常の仕事の重要部分を構成する。以下に掲げるのは、８月３日に行われるオープンキャンパスでの学長挨拶「三つの挑戦」の原稿（約 2000 字 10 分相当）である。

「下関市立大学によくいらっしゃいました。今日一日しっかり観察し、参加し、また尋ねて下さい。そして市大が「いい大学」であると確認され、本学入学の志をたててその志を来春までに成就されんことを、熱烈に期待いたしております。

本学は研究所と大学院を持っているので university を名乗っていますが、経済学部のみの単科大学という点では college です。複数学部にする構想は過去に何度か立てましたが、流行りの地方「行政改革」のターゲットにされて、構想が挫折しているのが現状です。

しかし、私が皆さんにお訴えしたいのは、本学の小ささ、貧しさを埋めようとする大学自身の熱烈な挑戦の姿です。知恵と努力で課題に挑戦する伝統的姿勢が「公立大学のいい大学」

としての市大の暖簾を形作ってきました。その姿勢の事例として、この秋にやってくる三つのことへの、私のあるいは私たちの挑戦をお話しいたしましょう。

第一に、授業料値上げの問題です。国連「経済・社会・文化的権利国際規約」13条の述べる教育機会均等のための高等教育無償化の先進国趨勢に逆らって、日本政府は1970年代半ば以降、ほぼ隔年に授業料、入学金を値上げしてきました。下関市立大学を含む殆どの公立大学もそれに随行してきました。しかし近年の規制緩和や構造改革の経済政策は、その必然的結果として、業者の事業や労働者の生活の困難の度を増大させました。子弟の高等教育費負担が限界に達して支弁不能となる痛恨の事例を私たちが繰り返し認識させられるこの頃です。加えて、今年度の市大財政は、授業料値上げ増収分を大学経費に充当しないという厳しい構造になりました。6月13日開催の教授会で、私たちが授業料値上げに反対する文書を採択した所以であります。7月12日の市と大学との協議の場で私はその趣旨を縷々説明いたしました。今日8月3日には授業料値上げ見送りの朗報が伝えられるようにとお願いもしたのです。残念ながらいまのところ朗報はありません。「大学の自治」とは言いながら財政的権限が大学には一切無い現状では、ひたすら大学設置者たる下関市に対して要求あるいは請願することしか大学にはできません。それでもこの挑戦はし続ける所存です。成就できないことがあるからといって挑戦を止めることはいたしません。

第二に「世界を目指す大学」として本学が重視する教育・研究における国際性の一つの実践として、今年11月12日（火）午後に本学を会場として「第2回下関市立大学国際シンポジウム」を開催する挑戦を紹介いたしましょう。第1回国際シンポは3年前に「経済危機と21世紀の東アジア」をテーマに、本学との交流校、中国・青島大学と韓国・東義大学校から研究者を招いて、東アジア3大学シンポとして開催されました。その第1回シンポに対しては、下関市は開催の意義を認め予算的措置をとりました。しかし、今回は市財政悪化の進行が反映され、予算要求は認められず、中止が大学に指示されました。私たちは、財政権限が市にあるとはいえ、シンポ、ゼミ、研究会の開催権限は当然ながら「大学の自治」の範囲と解して、資金を外部の篤志家から拠出して頂く形で、第2回国際シンポを「国際化社会の中での日本語教育」をテーマに開くことを決定し、いま準備を進めています。参加大学は、東アジア3大学にオーストラリアの本学との交流校、クイーンズランド大学とグリフィス大学を加えた環太平洋5大学の形となります。市民に開放して行われますので、どうぞ参加して「世界をめざす」下関市立大学の有様をみてください。

第三に「地域に根ざす大学」としての実践です。年々話題をよぶテーマ設定のもとに行われる夜間の市民大学講座、昼間の教養総合講座など、市民の生涯教育機関としての機能発揮や、産業文化研究所が北九州大産業社会研究所と連携して行っている「関門地域研究」などの王道に加えて、留学生と地域住民とのさまざまな交流などたくさんの実践ルートが形成されています。今年の9月1日には、さらにもう一本の地域連携の道がつけられようとしているのです。本学正門から坂を下って左折、500メートルばかり行ったところに、大きな前方後円墳を社域に含む生野神社があります。そこでの恒例の行事、風鎮祭で踊られる八朔踊りに学生、教員も加わって踊ろうという企画です。八朔踊りは平家踊りと対抗する伝統の踊りで、保存会が組織されています。その保存会の皆さんに踊りの講習をやって頂き、私も参加しました。入るに易いが極めるのは難しいといった感じの踊りです。どうぞ、下関市立大学の留学生などと一緒にこの踊りの輪に加わってください。私も浴衣を着て踊ります。」

(2002.07.30)